

心「清む」感謝のひと時



▲ 通学児童に「おはよう」と笑顔であいさつする中川さん（寝屋川市内で）

「お

はよう！ 気をつけて行きや。いってらっしゃい」

午前8時すぎ、河川沿いの交差点。中川春代（57歳・南平台分教会ようぼく・大阪府寝屋川市）は、通学中の子供たちに明るく声をかける。

毎朝、通学路周辺のゴミ拾いを続けて8年。交通誘導用の旗を手に、地域の子供たちの安全を見守ってきた。

お道と出合ったのは30年前。当時、小学3年生の長男・慎一（37歳・同教人・大阪府高槻市）が腎臓の病気を患ったことがきっかけだった。一向に病状が回復せず、悲しみに暮れる日々。そんななか「大丈夫や。心配せんでええ」と声をかけたのが、大工である夫・壽雄（61歳・同教会ようぼく）のもとへ、金物業者として出入りしていた男性教友だった。

その後、中川は男性教友に導かれ、夫婦で別席を運び、ようぼくに。ひのきしんの教えを知り、自宅のある団地周辺のゴミ拾いを始めたのは、入信から1年が経ったころだった。

「初めは、病気で入院中の息子をたすけていただきたい一心だった」と振り返る。

男性教友の懸命のおたすけにより、やがて慎一は退院。同年代の子供たちと同じように生活できるまでに回復した。

「生かされていること自体が、幸せで素晴らしい。報恩感謝を胸に、ひのきしんを続けさせていってほしい」と思った

地域のボランティアとして交通誘導を始めたのは、慎一の第一子の小学校入学がきっかけ。

「命はないとまで思った長男、そしてその子供を、順調にお育ていただいている。そのご恩返しをさせてもらいたい」。そんな思いで通学路に立ち続けた。

中川は、子供から大人まで年齢を問わず、誰にでも気さくに言葉をかける。

当初は「あまり返事がなくて寂しいと感じることもあった」と言うが、いまでは「笑顔であいさつをしてくれる人がほとんど」。朝の通学路には、いつも温かい言葉のやりとりがある。

この取り組みを通して、つながりの輪が広がった。

毎年「こどもおちばがえり」には、中川の声かけにより、マイクロバス1台分の親子が参加を申し込む。その中から、のちに学生会活動に参加する者も出てきている。

先日、ゴミ拾いをしていたとき、近隣の男性経営者から声をかけられた。

「毎日ありがとう。でも大変やろう。なんで、そんなに続けられるんや？」

中川は笑顔で「それはね……」と言って、男性にお道の話を取り次いだ。

「いつも笑顔を見せてくれる子供たちから元気をもらって、お礼を言いたいのは、こちらのほう。今後も、ご恩返しの思いでひのきしんに取り組み、いつまでも子供たちの成長を見守っていきたい」

今朝も交差点の一角に、母親のような優しい声が響く。